

小堀夢情報新聞ボランティア特集第15号

平成25年1月8日
発行責任者 小堀道和

漁業の復興なくして真の復興はない

東北の海岸線を襲った東日本大震災による多くの被災地は豊かな海の幸の恩恵を受けて生活していました。尊い命ばかりでなく家や車、船、漁具に加え船着き場、港、防波堤などインフラを含め生計を立てる全てを一瞬にして失いました。

東北の皆さんに笑顔が戻るには道のりは厳しくても漁業の復活が必要不可欠です。本号では漁業の復興に貢献したいと願って計画した活動を中心に紹介します。

荻浜の牡蠣養殖を応援したい

石巻市荻浜は内海の地の利を活かして牡蠣の養殖が盛んに行われている集落です。大震災によってほとんどの生活基盤を失いました。この苦境を乗り越えようとしている荻浜の皆さまと震災後の夏に実施した炊き出しを通して知り合いました。生活物質支援や浜の清掃などの活動をさせてもらいながら浜の皆様との信頼関係を築いてきました。

震災後の時間が経過すると共に徐々に生活が落ち着いてきましたが、やはり生活基盤の源である牡蠣養殖復興に貢献できるお手伝いがしたいと考えていました。しかし、牡蠣の種付けや養殖用ロープの仕掛けづくりなど、養殖復興に関するどの仕事も素人には難しく中々役に立つ仕事ができないのです。

それでもそんな中、ロープ仕掛けづくりのお手伝いをさせてもらった時にとても喜んでくれ、「何もしなくていい、話を聞いてくれるだけでいいからまた来て欲しい」と言われ、心寄り添う支援の大切さを実感し、とても嬉しい気持ちになりました。そうは言っても少しは実質的な経済支援につながることもさせてもらいたいと思い昨年度に壱萬円の応援ファンドを立ち上げました。

これは壱萬円を先行してお渡しし、時期も海の幸の種類も不問として半額分の海の幸を返してもらう仕組みです。そして今年度は大震災以来やっと牡蠣の収穫ができるようになる時期に合わせて多くの人に荻浜の牡蠣を買ってもらう経済の直接支援をしたいと思います。

荻浜の皆さまはチームワークが良く復興に向けて船着き場の修復など訪れる度に浜の景色の変化が見える地区です。牡蠣の解禁日である10月には牡蠣剥き用の建屋も完成し活気が戻る予定と聞き、この時期に牡蠣購入を目玉としたお買いもの応援バスツアー等を計画することにしました。

牡蠣購入の経済支援活動を企画

那須烏山市広報誌に掲載し参加を呼び掛けた経済支援お買いものツアーに加え前々号で紹介したガールスカウト指導者研修会でも荻浜の牡蠣購入を活動のメインテーマにしました。

さらにJAなす南の秋の収穫祭であるJA祭りにおいて東北の復興支援のため海の幸の直売をさせて欲しいと組合長から相談が



わかめの養殖も始めた荻浜



昨年5月実施のロープづくりのお手伝い



泊浜から届いたファンドのお返し



ガール指導者研修会も牡蠣購入

あったので荻浜の牡蠣販売を推薦しました。太平洋側の泊浜の海の幸も直売できないかと調整しましたが、残念ながらまだ直売可能な復興に至っていないので断念しました。ちょっと話が脱線しますが泊浜の壱萬円の応援ファンド対応状況を紹介します。

未だ漁をする条件が整っていないため壱萬円の応援ファンドについては泊浜から届く分が滞っています。一部の人に泊浜からウニが届きましたが未だ150名以上の分が送れていないのです。責任者の平塚英徳さんはとても気にかけられているので申し訳ない気持ちになります。現在ホタテで恩返しする計画を実現させるため浜の皆様と頑張っていますのでファンドを申し込まれた皆様にはもう少し見守ってくださると幸いです。

建屋建設遅れで殻着き生牡蠣購入となる

解禁日の10月に合わせ建設中だった殻剥き用建屋建設が職人及び資材不足で1ヶ月以上も遅れることになってしまい牡蠣の直売を諦めざるを得ないと荻浜の豊嶋区長さんから申し訳なさそうに謝りの連絡がありました。

漁業復興の経済支援が目的なので殻付き牡蠣で良いので購入計画は実施しようと提案しました。

特に海のない栃木県は殻付き牡蠣など見たこともなく貴重な海の幸で超人気の商品になることも訴えました。

殻付きのまま購入するには多くの障害があるものの私たちが努力すれば解決できるのであれば全てやらせて欲しいとお願いし豊嶋区長から笑顔の了解を得ることができました。



完成が遅れている牡蠣加工用建屋

牡蠣購入のための事前準備

荻浜の皆さんの負担を減らすため、事前準備として保冷ボックスの準備や海から水揚げされた牡蠣を各自袋詰めすることなど一人一人の協力する内容を決めました。

このようにすることで浜の皆さんは牡蠣の総数を水揚げするだけで済むことになるのです。素晴らしいことは浜の皆さまと会話する時間がとても多くなることです。一般の復興支援の買い物ツアーが旅行会社を中心に実施されていますが浜の皆様と直接話す機会は少ないと思います。私たち龍 JIN のツアーは参加者にとっては手を汚す仕事があり大変ですが明らかに直接応援している気持ちが湧いてくると思います。

すぐ定員になる経済支援復興応援ツアー

牡蠣購入を目玉にした復興応援バスツアーの募集を市広報誌に掲載しました。前回実施した時と同様、3日ほどですぐに定員となりました。被災地のためにできることをしてあげたいと思っている人はたくさんいるんだと思いました。今回は新聞掲載をしたことで締め切った後にかなりの人にお断りした経緯もあり一般メディア掲載をしませんでした。しかし、下野新聞始めタウン誌などから掲載しましょうかと声を掛けてくれ、応援されていることを実感しました。

経済支援復興応援バスツアーにJAも参加

11月3日～4日実施するJA祭りでの牡蠣販売の打ち合わせを兼ねて、一週間前の10月27日催行の復興応援バスツアーにJAの皆さんも参加してはどうですかと提案したところ山田組合長含め3名が参加してくれることになりました。殻付き牡蠣を2日間にわたって直売するためにいろいろな調整事項を直接話し合うことで被災地の皆さまの心に寄り添う真の支援活動になるだろうと思い嬉しくなりました。

山田組合長は栃木県の名産品「にっこり」という高級梨を荻浜始め今回訪れる5か所の被災地にプレゼントしたいと申し出てくれました。

ツアー当日、荻浜では豊嶋区長とJA山田組合長が業種は農業と漁業と異なるものの同じ協同組合組織としてこれからも共助の心で助け合っていくことを話し合っていました。



牡蠣を手に荻浜豊嶋区長とJA山田組合長

11月3日～4日のJA祭りでは荻浜の現状を 泊浜の皆様が笑顔で迎えてくれました。考慮し当日合計500～1000個の牡蠣を宅急便でJAに送ることに決まりましたが、もっとたくさん販売可能なのですが復興途中の状況では精一杯の数量であることが分かりちょっと寂しい気持ちになりました。

JAを含む復興応援バスツアー参加者総計29名は荻浜以外にも鮎川地区の仮設店舗でのお買い物やいつもの鯨入りの新鮮なお寿司弁当に舌鼓を打ちながら被災地の皆様との交流を積極的に行っていました。



「にっこり梨」を囲んで泰平荘・阿部さん、泊浜・平塚さん、黄金寿司・古内さん



黄金寿司の鯨入り寿司の昼食～鮎川小仮設住宅

殻着き生牡蠣直売の難しさ

殻付き牡蠣は容積的にも重量的にも輸送効率が極端に悪くなり数量が激減してしまいます。売上げ額減少の対応として蒸したり焼いたりして販売しようと提案しましたが保健所との調整が困難なため断念しました。食の安全を考慮し「一日前に水揚げした新鮮な牡蠣ですが火を通して食べてください」とのメッセージを用意しました。さらにJAは販売の前日に念のため保健所の許可を取得することを決め、JA 内部で対応を模索していました。前日に許可を取得するのは困難でしたが復興支援のイベントを成功させようと願う多くの関係者の努力で保冷状態を維持する条件付きで許可を得ることができました。

今回は販売総数に限りがある中でたくさんの人に復興支援の応援をしてもらいたいと考え荻浜の責任者とも相談し4個1袋500円で販売することにしました。販売価格は経済支援が目的ではあるものの直売のメリットを考慮し割安感も感じる価格にしました。総量も2日分で900個送れますと連絡があり、いろいろ難題がありましたが全てをクリアし、あとは完売目指して頑張るだけの状態になりました。

JA祭りでの驚異的な人気の殻着き生牡蠣販売

下野及び読売新聞にPR記事を掲載してもらったこともありJA祭り当日、まだ荻浜から到着していないにも拘わらず行列ができる人気商品でした。宅急便到着まで待つ欲しいと説明しても納得してくれないのです。段取りが悪いとどなる人や「販売できるまで復興したのですか、嬉しいですね」と声を掛けてくれる人などたくさんの人でごった返す状態でした。

宅急便が到着したのを見て走りこんで並ぶ状態の中で販売開始しましたが、1時間も経たずに売れ切れてしまいました。

新聞情報で2日間販売するとPRしたので途中で気が付き、慌てて1/3程度翌日の分として残しました。

実は前々号で紹介した通り牡蠣には1/3程度ムール貝(むらさき貝)が付着し同時に水揚げされるのです。値段も牡蠣より高く美味しいので10個500円で販売しましたが経済支援に大きく貢献してくれました。

翌日はムール貝のPR記事が新聞に掲載されたこともあり牡蠣もムール貝も順調に売れて午前中に完売しました。

売上目標122,220円をはるかに超える145,000円の売上でした。直ぐに荻浜にJA組合長と一緒に笑顔で報告しました。荻浜の皆さんもとても喜んでくれ、充実した気持ちをJAの皆さんと一緒に味わうことができました。

さすがに2日目は時間的にも余裕があり、準備した荻浜の様子を紹介する写真で多くのお客様に説明することができました。「復興が進んでいないのはどうしてか」というような質問をされる方、牡蠣の出荷ができるまでに復興したことを共に喜んでくれる方や「どのようにして食べるのか」と質問される方など、いろいろでしたが多くの皆様に被災地へ思いを馳せるきっかけになったイベントでした。

活動を終えて

本号では漁協の復興支援活動として実施した石巻市荻浜の牡蠣養殖支援活動を紹介しました。私たち龍JINの活動が荻浜の経済復興に貢献したのはほんの微々たるものだと思います。

しかし、一生懸命応援しようとしている心は伝わり、前向きな気持ちを引き出すお手伝いに貢献できたのではないかと思います。

前向きな気持ちが不可能を可能にしてしまった例がたくさんあります。この素晴らしい事実を信じてこれからも活動していきたいと思っています。



行列ができる驚異的な人気の生牡蠣販売



必死で袋詰めするJAと龍JINスタッフ



目標額も達成し完売記念の笑顔ポーズ



いつも笑顔で迎えてくれる鮎川仮設店舗おしかのれん街ラーメン屋さんのおかみさんと

添付資料

下野新聞及び読売新聞に今回の活動が紹介されました。参考に読売新聞記事を添付いたします。応援してくださる報道関係の皆様には感謝いたします。

平成24年10月30日 読売新聞

(第3種郵便物認可)

那須烏山のボランティア団体

カキ養殖の漁師や民宿経営者、飲食店主など、日々の生活を取り戻しつつある東日本大震災の被災者の話を親身に聞き、買い物をする……。那須烏山市の市民団体が取り組むボランティアツアーが被災者、参加者の双方に好評だ。力仕事でないため50、70歳の男女も「参加しやすい」と人気で、被災者にとっても「少しずつ仕事ができるようになってきた今、長いお付き合いと温かい励ましは何よりうれしい」という。

取り組んでいるのは、那須烏山市のボランティア団体「龍JIN」(小堀道和代表)。「龍JIN」は、宮城県や地元那須烏山市の被災者を中心に活動を続け、宮城・牡鹿半島への訪問は20回を超えている。

28日午前6時20分、同市中央の市役所駐車場を60歳前後の男女30人が大型バスで出発。「石巻市牡鹿地区復興応援ツアー」と銘打って実施した。

東北道などを経て、午前11時前、最初の訪問地、牡鹿半島・萩浜のカキ養殖場に到着した。100戸ほどあった集落は津波によって3戸しか残っていない。カキ漁は10月が解禁。普段なら忙しいさなかだが、再建中の殻むき処理場の建設が遅れ、完成する11月中旬までは漁師も手持ちぶさたな様子だ。

近くの仮設住宅に住むカキ養殖漁師のリーダー・豊嶋祐二さん(59)は「完成すれば、約50人が殻むき作業に追われる。完成は復興の第一歩になる」と明るい表情で、一行もそれを一緒に喜んだ。殻付きのカキを購入した参加者の一人、倉貫静夫さん(73)は「新鮮なカキを買うことができるのと、少しでも支えになることができてうれしい」と話した。

山田清・JAなす南組合長は、11月3、4日に那須烏山市白久で開かれる恒例の「JAなす南まつり」で「牡鹿のカキ」を販売し、売り上げを全額寄付しようという提案した。500、1000個の納入が約束され、3個500円で販売する予定だ。

牡鹿半島の南端、鮎川浜では、仮設住宅集会所でクジラの刺し身入りちらし寿司

カキ養殖漁師を支援するため、JAまつりでのカキ販売の話をした山田組合長、小堀代表、カキ養殖漁師の豊嶋さん(右から)(28日、牡鹿半島で)

被災者の「生の声」聞き、カキ売り上げ全額寄付

の昼食。すし店や民宿経営者から復興状況を聞いた。漁師の平塚英徳さん(65)は「応援してくれるみなさんに会えることが笑顔の源。長いお付き合いを願っている」と話した。

小堀・龍JIN代表は「いつまでも応援しているよ、と心寄り添うメッセージを送り続けることが今、一番大切。これからもツアーを計画したい」と話していた。問い合わせは小堀代表(090・1611・5491)へ。



■JAまつりでのバザー等で募った義援金を全て龍JINに寄贈を伝える下野新聞記事 平成24年12月20日



同JAは、11月のJAまつりで被災者支援のためのバザーを実施しており、その益金と会場で募った義援金を同チームに贈った。山田清組合長は「目に見える形で寄付金を使ってもらおうと考えた」としている。

被災者支援活動
団体に寄付金
JA那須南
【那須烏山】JA那須南はこのほど、東北地方の被災者支援活動に役立ててほしいと、市災害ボランティアチーム龍JINに約13万8千円を寄付した。写真。